

## 15 世紀後半のローマでの画家たちの協働関係

### –ピエルマッテオ・ダメリアと教皇庁周辺の絵画作品–

永井裕子（昭和女子大学）

ピエルマッテオ・ダメリア（1445/48-1508 年頃）は中部イタリアの教皇領地域で活動した画家である。ローマではシクストゥス四世の時代に教皇庁関係の作品制作を始め、続くインノケンティウス八世、アレクサンデル六世の下で活躍した。教皇庁の史料から教皇たちに重用されたことが古くから知られていた一方で、この画家と作品については未だに十分な研究蓄積がなされていない。教皇庁周辺での現存作品の少なさがこの画家の重要性を希薄にしている原因だが、それ以外にも他の画家との協働関係が結果的にこの画家の存在を埋没させたことが原因としてあげられる。本発表はピエルマッテオ・ダメリアと当時のローマで活躍した画家たちの協働関係を史料と作品の精査を通して明らかにし、教皇庁周辺でのこの画家の重要性を浮き彫りにすることを目的とする。

まず、15 世紀後半の教皇庁周辺で活躍した画家たちの協働関係について、ピエルマッテオ・ダメリアをはじめとした画家たちに焦点を当て、教皇庁の記録からその事例を確認する。当時のローマではローマの画家、ウンブリアの画家、ローマニアの画家などの多様な出自の画家が活躍していた。これらの画家は祝祭行事や教皇庁施設を飾るため、旗飾りや紋章などの現存作品のない装飾品の制作を請け負い、その際に複数の画家が共に制作にあたった。ピエルマッテオ・ダメリアが 1480 年代から 90 年代にかけて画家たちと作品制作に関わったことを史料から確認し、教皇庁での存在感の大きさを確認する。

次に、ヴァティカンのベルヴェデーレ宮殿装飾の協働事業でのピエルマッテオ・ダメリアの役割を、関連作品との比較を通して具体的に検討する。1487 年に完成したインノケンティウス八世のベルヴェデーレ宮殿一階は開放的なロτζアで、廊下状の空間が複数の区画に区切られていた。18 世紀に古代彫刻ギャラリーが設置された際に宮殿はその一部として改修され、西端に位置した小礼拝堂と聖具室はギャラリーを拡張するために取り壊されたが、ロτζアに描かれていたフレスコ画の一部は現在でも残されている。ヴァザーリは、宮殿の小礼拝堂にマンテーニャが壁画を描いたほか、ロτζアにはピントリックキオがイタリアの諸都市の景観を描いたとしている。そのため、この宮殿の現存する壁画は主にピントリックキオが描いたと考えられてきた。一方で、1490 年前後の支払い記録から、ピエルマッテオ・ダメリアも宮殿装飾に関わったとも考えられているが、両者の描いた壁画の区別や二人の協働関係、他の画家の関与について不明瞭な点が多い。そこで、近年になって両者の関わりが明らかになったヴァティカン宮殿「ボルジアの間」の壁画のほか、ローマのパラッツォ・デイ・ペニテンツィエーリの装飾画など関連作品と照らし合わせることで、二人の画家を中心としたローマの画家たちの協働制作実態の明瞭化を試みる。